

# 「子どもも主体」脱「画」

## 定員超えの人気

### 「子どもの森学園」開設15年



国の教育課程にとらわれず、子ども主体の教育を展開する小中学生対象の通学施設「箕面」子どもの森学園（箕面市）が開設15周年を迎え、入学希望者が定員を超える人気ぶりだ。児童生徒自身が学習計画やルールを決めて取り組んだりするのが特徴。「持続可能な社会づくり」の担い手育成に注力している。

（加星宙磨）  
004年からスタート

同学園は認定NPO法人が運営。大学の教育現場で目的を持って学ぶ学生が少ないことを問題視した代表理事（学園長）の辻正矩・大阪工業大名誉教授らが、画一的な教育現場に対し、子どもを育てる「土壌が大事」とそのスタイルや規模から法定の「学校」ではないため、卒業資格は地元の公立学校に在籍する形を取って取得できるようにするが、平和や気候変動などもテーマにした「持続可能な開発のための教育（ESD）」が評価され、国連教育科学文化機関（ユネスコ）からユネスコスクールに認定されている。

子どもの興味や関心を学習の起点にし、子ども自身が主体となって学習計画を組み立てるフランスの「フレネ教育」をモデルに運営している。

そのスタイルや規模から法定の「学校」ではないため、卒業資格は地元の公立学校に在籍する形を取って取得できるようにするが、平和や気候変動などもテーマにした「持続可能な開発のための教育（ESD）」が評価され、国連教育科学文化機関（ユネスコ）からユネスコスクールに認定されている。

望がある状況だ。辻代表理事は「中学部ができた点だけでなく、11年の東日本大震災の年から人々の意識が変わってきたのではないかと分析する。関西に移住してきた人や外国籍の家庭も増え、多彩な立場の人を講師

に招いた連続講座などもあり、守安あゆみ副代表理事は「子どもだけでなく大人も学ぶことが大切」と指摘する。7月には、15周年記念パーティーを実施。関係者や支援者、卒業生らが集まって節目を祝った。辻代表理事は「持続可能で共生的な社会づくりに貢献していきたい」と意欲を示している。

大阪では、理科の実験回数が全国平均を下回っているのが課題の一つとなっており、同校の和田征土理事長は「高齢者が学び、その力で将来を担う子どもたちの教育に少しでも貢献できれば」と思いを込めていた。

■地球市民の視点  
当初は小学生を対象にした小学部から始め、在籍人数は7人。その後はおおむね10〜20人で推移し、時には6人まで減って存続が危ぶまれる時期もあったが、5年ほど前部

区民センターで開かれた。約30の多彩なプログラムが繰り広げられ、子どもらは好奇心を刺激されていた。

認定NPO法人大阪府高齢者大学校が主催。同校で学んだ高齢者らが講師となっており、実験や工作ができる場を用意し、科学が好きな子どもを育てようという思いで、3回目を迎える。

会場では、10円玉を輝かせたり、静電気で遊んだり、身近な物でその仕組みを学べるようにしたプログラムがずらり。液体窒素や磁石を使った実験教室

た有賀千隼君（9）＝東大阪市＝は「面白かったし、おいしかった」と喜んでた。

（加星宙磨）



子どもたちの好奇心刺激

（加星宙磨）